

平成 24 年 2 月 7 日

津波シミュレーション調査の断層設定の考え方（案）

1 本県における津波レベルの想定

○国では、2つのレベルの津波を想定（太平洋側の海溝型地震を想定）

①発生頻度が高く、津波高は低いものの大きな被害をもたらす津波

②発生頻度は極めて低いものの、甚大な被害をもたらす最大クラスの津波

○本県では、海溝型地震ではなく、活断層地震による津波が想定されており、上記①の百年に1度程度の「発生頻度の高い津波」は文献調査において確認されていない。上記②についても、文献調査において、東日本大震災のような（700～1,000年と推定される）海溝型の津波は確認されていない。

○しかしながら、本県では、念のため、あらゆる可能性を考慮して、県民の一層の安全・安心の確保に資するため、さらに発生確率の極めて低い、3～5千年程度の活断層（呉羽山断層帯）や、未確認の断層（糸魚川沖や能登沖の断層）による津波を想定することとする。

2 津波想定のための断層設定等の考え方

防災会議地震対策部会の川崎専門委員及び竹内専門委員の助言を踏まえ、次のとおり設定

(1) 断層の「すべり量（断層面が滑り動く距離）」

①断層調査により、すべり量の実測値が確認されている場合

→ 当該「実測値」

②断層調査が未実施で、すべり量の実測値が確認されていない場合

→ 「標準算式による値」（断層面の面積等により算定。文科省地震調査研究推進本部で採用）

(2) 念のため、あらゆる可能性を考慮し、確率は極めて低いですが、これまで連動が確認されていない断層が連動する場合も想定

(3) 最悪の事態を想定し、海岸保全施設等が「有る場合」に加え、「破壊される場合」も想定

3 今回の調査の対象地震

① 呉羽山断層帯の地震

(地震規模 M7.4、長さ 35 km、すべり量 2.9m 【実測値】)

②-1 糸魚川沖地震

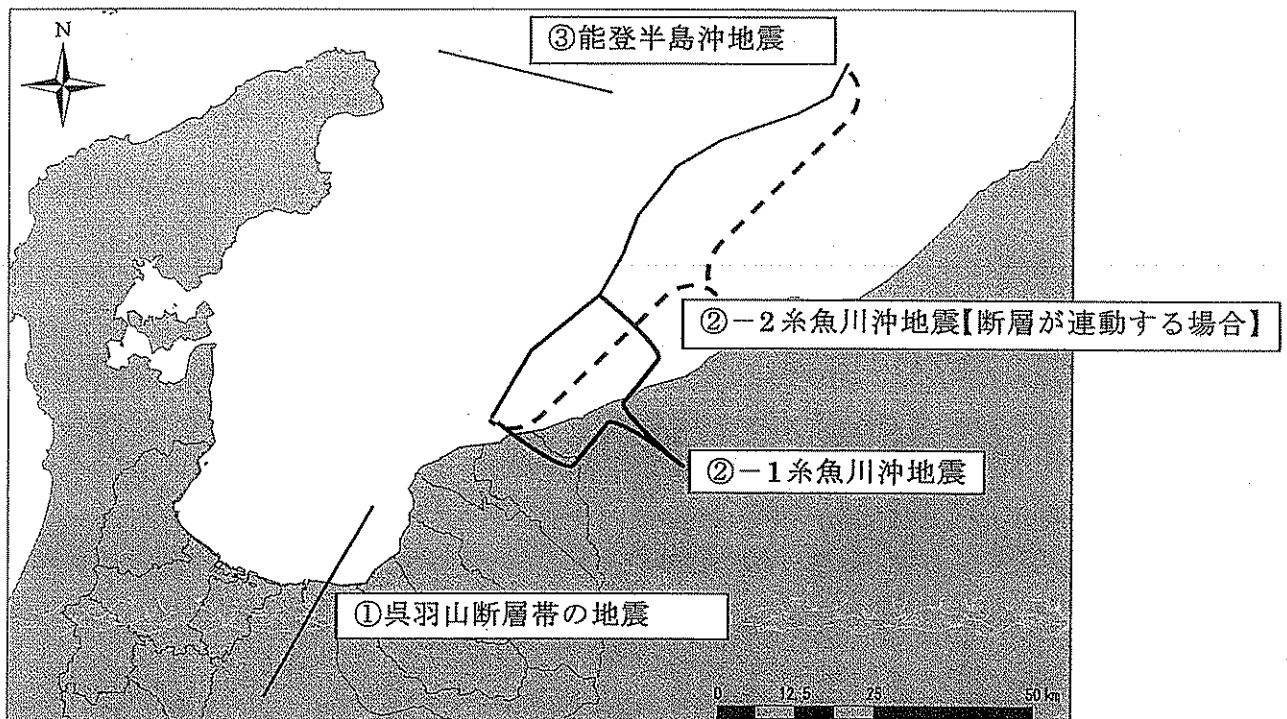
(地震規模 M7.2、長さ 28 km、すべり量 2.2m 【標準算式】)

②-2 糸魚川沖地震【断層が連動する場合】

(地震規模 M8.0、長さ 84 km、すべり量 6.6m 【標準算式】)

③ 能登半島沖地震

(地震規模 M7.2、長さ 28 km、すべり量 2.2m 【標準算式】)



4 調査内容

(1) 調査事項

津波高、到達時間、浸水想定図 等

(2) 市町村が作成するハザードマップへの支援

本調査では、市町村が避難場所や避難経路などを記載したハザードマップを作成できるよう、想定される浸水域全てについて、10mメッシュで浸水想定図を作成する。